明日への道標

地を異にするも心はおなじ
―社交界の華 陸奥亮子―

㈱日本設備工業新聞社
代表取締役社長　高倉克也

妻を亡くした陸奥宗光は新橋一の美人芸者を後妻として迎え入れた。28歳の宗光は先妻ともうけた幼い息子たちを抱えていた。17歳の陸奥亮子（1856－1900）は花柳界の名妓から一転して二児の母親となり、子育てや夫の世話に追われた。

反政府活動で宗光が獄中に囚われたときも亮子は働きながら一家を支えた。やがて宗光は欧米諸国との不平等条約を改正する外交の立役者として大成する。亮子も懸命に英語を学び、教養を積み、一流の貴婦人として宗光を手助けした。

歴史に名を残した人々は決して自分だけの力で何かを成し遂げたわけではない。宗光も舞台裏に亮子がいることで檜舞台に立つことができた。

美貌で賢い妾の子

亮子は現在の兵庫県南西部に位置する播磨国龍野藩・江戸勤め旗本の妾の子として生まれた。明治維新を迎えて東京・新橋の柏屋に奉公に出され、踊り、三味線、常磐津、小唄、清元の稽古に明け暮れる。覚えが悪いと竹の尺指しで容赦なく叩かれた。下働きを３年、12歳で半玉、17歳で芸妓になり、お座敷に出る。

小鈴と名づけられ、天性の美貌と気品と芸風でたちまち評判になる。身持ちは堅く男嫌いという噂が広がった。政財界の大物からどんなに大金を積まれても言いなりにはならなかった。花柳界に身を置きながら自分を守る術を心得ていた賢い女性だった。

そんな亮子も宗光には秘かに好意を抱いていた。現在の和歌山出身の宗光の父は紀州藩の重臣で寺社奉行や勘定奉行を務めていた。しかし藩内の政争で失脚し、一家は窮乏生活を強いられる。宗光は江戸に出て土佐藩の坂本龍馬と知りあい、龍馬の師である勝海舟が開設した神戸海軍操練所を経て龍馬の率いる海援隊に加わった。宗光は商務担当として資金繰りなどに抜群の才覚を発揮し、龍馬に「二本差しがなくても食っていけるのは俺と陸奥だけだ」と言わしめた。

陸奥亮子

明治新政府が成立すると外国事務局御用掛となり、海外使節の応対にあたった。続いて大阪府知事の後藤象二郎のもとで働き、難波新地の芸者を娶ってふたりの息子をもうけた。

1872年２月に妻が病死し、東京に戻った宗光は５月に亮子を見初めて後添えにする。再婚を急いだのは子供たちを使用人に任せたくなかったからだ。求婚を受け入れた亮子は薩長中心の藩閥政治のなかで孤軍奮闘している宗光の悔しさを知っていた。亮子が実の母親のように育て上げた長男の広吉はのちに外交官、次男の潤吉は古河財閥総帥の古河市兵衛の養子となる。結婚の翌年、宗光とのあいだに女の子が生まれ、隅田川の近くにある清澄町にちなんで清子（さやこ）と命名した。

一家を支えて猛勉強

有能な宗光は大蔵省租税頭などの要職を歴任したものの、薩長閥の横行に強い憤りを感じていた。1878年、西郷隆盛が明治政府に叛旗を翻して西南戦争が勃発し、宗光は土佐立志社の挙兵計画に加担した疑いで逮捕された。禁固５年の刑を科せられ、東北の山形監獄に収監される。

獄中ではイギリスの功利主義思想家ベンサムの著作の翻訳に精を出し、出獄後に科学正宗の筆名で『道徳及び立法の諸原則』を刊行した。山形監獄で火災事故が発生すると、のちに総理大臣となる伊藤博文の手配で宮城監獄に移される。

当時23歳の亮子は宗光の友人の家に身を寄せ、日本赤十字社の社員となって家計を支えた。宗光は獄中から亮子への慕情を漢詩にして贈っている。「夫婦天涯別れること幾春ぞ、相思空しく求む夢中の真。離合は常理といえども、相思の情に何ぞきわまりあらん。南北二つながらに地を異にするも、夫婦この心は同じ」と。

1882年、宗光は特赦によって出獄し、翌年から伊藤博文のすすめでヨーロッパに留学した。西洋文明を肌で実感した宗光は亮子に宛てた手紙で「御身の写真も御つかはし。しかし急ぎ申さず候まま、よくでき候うよう上手の写真家にて御うつしなさるべく、西洋服の半身の方よろしかるべし」と写真の撮り方から服装やポーズまで細かく指示を出している。

1886年、宗光は帰国し、初代外務大臣の井上馨の計らいで外務省に出仕する。海外の賓客を交えた社交界にデビューした亮子は新聞や書物を熱心に読んで教養を身につけた。とくに東京日日新聞、小説は『八犬伝』、『弓張月』、歴史書は『日本外史』、『十八史略』、和歌は『古今集遠鏡』、文章の手本として『源氏物語』、『徒然草』などを好んで読んでいた。井上の妻の武子のもとで英語、ダンス、洋裁、テーブルマナーなども猛勉強する。

社交場で亮子と出会ったイギリス駐日公使のアーネスト・サトウは日記に「美人で涼しい眼と素晴らしい眉だった」と書き記した。彼が容姿を褒めた唯一の日本人女性といわれている。

まるでわが子のように

1883年、文明開化の象徴として鹿鳴館が３年がかりで落成した。イギリスの建築家ジョサイア・コンドルが設計し、総建坪400坪の煉瓦づくりで２階にバルコニー付きダンスホールが設けられた。西洋文明を謳歌する豪華な社交施設として国賓の接待、舞踏会、慈善バザーなどで日夜賑わう。

女性は19世紀後期フランス風の服装で夜会巻きという束髪をしていた。亮子は岩倉具視の娘で戸田伯爵夫人の極子と共に鹿鳴館の華と称された。

1888年、伊藤内閣の駐米公使として宗光は亮子と共に渡米する。ロッキー山脈を越えてワシントンに着き、クリーブランド大統領夫妻と接見した。メキシコ特命全権公使を兼ねていた宗光は日本初の対等条約となる日墨修好通商条約をメキシコと締結する。

アメリカでも亮子はワシントン社交界の華と謳われた。毎朝２時間、日本の小説を英語に翻訳して出版し、新聞や雑誌で大きく取り上げられた。

1890年に帰国し、宗光は第１次山縣内閣の農商大臣に就任する。２年後に第２次伊藤内閣の外務大臣となり、不平等条約の改正に辣腕を振るってカミソリと仇名（あだな）された。1894年、イギリスと日英通商航海条約を締結し、外国人の犯罪を裁けない治外法権を撤廃する。以後、アメリカ、ドイツ、フランスなど15カ国との条約改正を実現した。

しかし日清戦争終結をめぐる交渉が難航し、持病の肺結核が悪化して外務大臣を辞任。ハワイや大磯の別荘で療養したものの1897年、54歳で起伏に富んだ生涯を閉じた。遺書には「亮子の内助の功によるものが少なからず」と記されていた。３年後、病弱だった亮子も宗光の後を追うように45歳の若さで他界する。

宗光の死後、しばらくして亮子は伊藤博文から宗光と祇園芸者のあいだに生まれた冬子という娘がいることを知らされる。亮子は怒りもせず８歳の冬子を広吉の養女として引き取り、まるでわが子のように可愛がった。